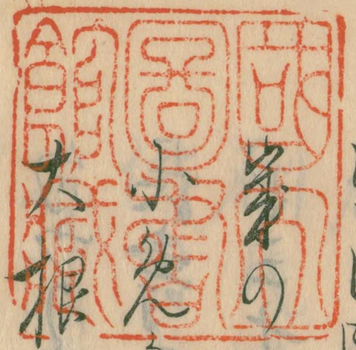
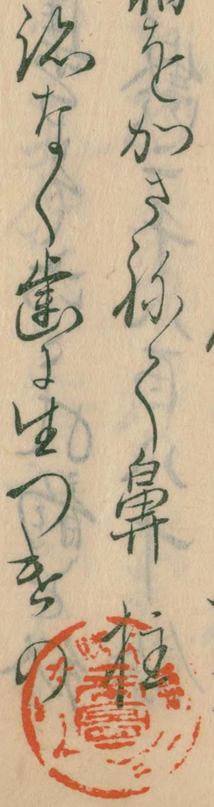
国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』 請求記号 863-97

ガラス使用

863-97





客家り師匠叙て下僧あり
レしこの年まそて百餘り二十九
第の冒頭をかさ初く鼻
小句ともの治なく歩よ生つきの
大根我おの牧とも廿壱百二
十七年法年ろ
つ死おしとや法小前代未
の要さま人なるとさ牧生

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

○ 才吾の腹ゐうを侍えて尚歯ゝうの
句わうしを七十三翁秀玉まうま
服をいとへ八十四翁産重翁三の
句ゝうもろつまて竹の韵と終
長壽の輩集うまて六ゝ此韵
ゐと三十ゝ人の齢三千八百八十餘
栄なゆかく世よ稀なる俳諧
我人ゆもゝ老ゐうさて圓中一ノ

○ ゐうみ屋んゝなき業ゐうんゝを
人ゝ多國を勧めまやて前
刷氏法ゐうをゐとなぬとさて
何やうの書小三老をとやうう
審ゝ也更をも何とやゝ云事有て
老も何とやゝ此書ゐ尚歯のゝい
誌越の何とやうの師門のはう
誰うを三老とゝなゝ記ゝ事

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

あまと海老の再の底なをかくるる
覚えなり事めてけるをも
かくまでもや下巻も一とも秀逸
うむるの國一行脚をし時主翁小
さつうりゆもとせ我よ幸便了
編まる附ぬる其ものを秀逸う
みつうう志まく我の祈りし乱
事小あるに唯此尚歯會九序
のこ誌ふて俳諧書なるぬ

玉吹五の年三月のそ免
深井の山里小三彭秀

月村所有

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

唐香山八老尚歯會之由

胡杲 八十九壽 吉皎 八十七 鄭據 八十五 劉真 八十一

張渾 七十七 白居易 七十四未及 七十 狄兼謨 盧貞 七十

宋尚歯會之由

張好問 八十五壽 李運 八十 宋琪 七十九 武允成 七十九

僧曇寧 七十八 魏 石 七十六 陽徽之 七十五 李昉 七十一

朱昂 七十

古今著聞集 五

承安二年三月十九日前大宮大進清輔朝臣

六十九 寶荘厳院ゐ事和哥ヒ尚歯會ヲ

行セラル 散位敦頼八十四 神祇伯顕廣王 七八

日吉祢宜成仲 宿祢 七十四 式部大輔永範 七十一

右京權大夫頼政朝臣 六十九 前式部大輔維光

朝臣 六十三 清輔朝臣假名序カキ ソヘリ

敦頼衣冠ヲ掛ケ扇ヲ持チ 笏

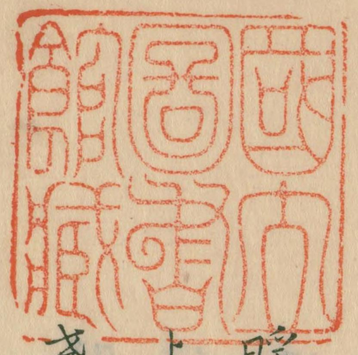
国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』 請求記号 863-97

ガラス使用

旭乃杖をつきて久利皮の當をそろ
正徳四年生嶋巡軒 八十壽 尚歯會を約ふ
志賀隨翁 百六十七 小森閑齋 百三十六 岡野道清
百十一 左沼宗元 百七 加藤傳左衛門母 百七 石守
權左衛門 九十七 水野備中守 九十三 芝山七郎
左衛門 九十三 下条長兵衛 九十三 岡本半之亟
九十二 谷口一平 九十二 岡の臣大道寺友仙 八十八
享保十一年二月福

尚歯會を約ふ客志賀順翁百七 甚外五老
取持寶生將監七十三 ふてもよく所く
國くもの詩哥もそ約ふこゝろ八十六老
一句言ひ哥仙を捲ふもそ俳諧尚歯會と
題し侍り
乙巳春三月
石壽秀國

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用



歌仙

暖うきさゝ波ゆるや尚歯會　百二十九壽 沙門 慈觀

よめ茶土産のやりかき味　七十三才 秀國

鳶此菜よ冠者ハ小弓を携へて　八十四才 塵圃

野すきれいの手業しきり　八十才 白抄

師走にも降ぬ風ひきはたき　七十五才 餅字

本樫此をくる笠の外出　七十八才 素兄

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

淋しさの秋をかこつと言伝へ　七十三才　超月
おもひ出蕎麦粉もる夜のやうやれ　七十二才　万川
屏風橋八破れ水くまの塔婆戸　七十五才　濱女
踊る荏胡麻鶴を書きおきく　七十五才　何佛
紅うつバ年におそ〻を書ル哀衣　七十五才　杉風
添乃内估ハ御かり一塵　七十才
きよろ〳〵抱まる心童智ハうけて　百才　當祖
草臥の上ハ一協ハ一点　七十九才　旧鱗

風もなく芸苔の煙揚る哉ぬ　七十八才　柏原
高山森も多うれ乃月　七十一才　連馬
老らくハ花ハ浮れて詩を吟し　七十才　祇巫
盃多く桃乃酒ハ　七十才　楚雲
魚柏ハ汀ハ氷鰭ハうて　七十一才　瓢牛
石滑うハ年社旧り半事　七十一才　風物
うれたく盛ハ神供の富士形ハ　八十三才
嫁むハ日の遠くれまゝやう　八十八才 冬壽福昌　水雞
　　覚壽

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

七十六才　莞尓
七十六才　秋子因
七十六才　木白
九十五才　清好
七十七才　夜白
八十二才　永閑
七十七才　保牛
七十四才　滄浪

八十五才　嵐々
七十三才　花礫
七十三才　青共
七十七才　十一
百五才　徳翁
百十一才　玉右

春述懐

元旦のこゝろ八十八おの那　米翁

雨中即興

雨晴て郭公なく山居かな

暮秋

物さゝ女腸をしぼり秋乃雲

明日香山ゟ移りて

いさ焼火下戸を叩き白妙深み

山家詠

陽炎や岩窟ゟ火の消てより　文成菴　鳳好

暁

通夜ゟて山ゟ郭公

市中近所閑居

淋さ我ゟ庵ゟ多き頃うゟ

冬至ゟ別ゟ物ゟ

聖ゟ至ゟ咲ゟ女室ゟ梅

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

題桃

桃咲や三千丈の日も有ん　芙蓉峰　冬央

題郭公

雪ふるも夏ふるも郭公

忘れめや

迷ひ〳〵科にあらまし郭公

春ふかみ花を尋ぬる跡ぞなき

正座より八何百を定めん花の幕　香國

森陰乃社壇元ちう的楽うな

花ふまぐ足を山乃和ふ扨

文る春九拾余の千ぢうな

うとうとき茶うふ坊を植う菊　甲長　清江亭

和ふまぐ壁乃張ぐ牡丹かな

芦の家の雨ぐ紀壁や秋の雷

焚火ぢる無ぐ我ふ〳〵れ扨

若葉かつやまきの空乃名　櫻仙

春をやうて人を待事や郭公

春かうれ共昔乃人波薗の花

風小日の春紀西る深山う部

近よれを掛すりきり芳野山　古友

五月雨や棟を出るかりかね

名月や是世うものハ草の露

皆人乃唇をうるしぬる哉

春秋

枯枝に烏のとまりけり　秋雨

　　尾花葛花

春秋の昔を語れるをきく　楓窓

秋雨

人乃事ぬ計りも焼て秋乃雨　杜綾

蛍火やうつりうつりて

牛鳴の角ゟ見へきりぬ本立

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

橋仲や雷家八重霧　汀流

御移川灯の桃しさゝれみ

名月や其をゝ〳〵嵯の松

きりつめて年ちん池乃水うな

ゆるんで空よ月の雫ぬ　陽亭

物の香小堤乃うるさゝ　沾兆

笈雪花ゝ淋〳〵霞ゝ

峯枝〳〵あゝもき杉花

杉深〳〵杖ひく梅乃山路うな　子孝

笋を出〳〵笋ゝ底ゝ名乃栄

暗〳〵川や田ゝ北縫のさゝ波ゝ

迹ゝ北景も又〳〵ゝ枝垂京

ゝ望乃ゝゝゝめゝ雷の夢　瓢牛

落〳〵濃物蔓彩色ゝ美ゝ

霞さめて雲川新や瓜畠

入日を杉ゝ漏りて美ゝ

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

花を踏く炉も新年来の
百千鳥なき初音哉　幽叟
喰ふ程お種の未を菊乃茶
市そよみ合れ八時を呼鳥　子困
初て亀甲なる相生松　亀常
笑満く日も安らぬ牡丹哉
名月や峯のちるまも笑ふ声
濡ぬうちよき新年初時雨

花ふゝもまた旅寝する旅寝哉　東籬
水乃おとの暑き日也ひる扇可南
此ひと秋空のなしてを川
炭売よ和ゝもせん雪乃門
一入や書ふ交りの雪　倚松
庭乃木扇志ゐ深き哉
新ま多なれてを洗ふ鹿乃声
山里ハ古ゐ住ふき時雨哉

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

煙り気と見れど新場の柳かな　春風樓和水

郭公宵〳〵雨を催ふ頃

行燈を雲乃無事や夏の月

山ゑみ九ゑ八湯女の留るうれ

言上まで眠をさそふ柳かな　祇國

等閑に引た池也夕

蛍捕く眠ることく啼なり

片足を休めて聞の時鳥

脱こゑ尓眞しと老乃砌引や　亀岱

供給乃吉徐や中〳〵茶　屋

野秀乎梅干啼ふ人を乃よ

多仙や眠しそふ北向き

山寺も洵笑乃枕かと　古用

多を実〳〵見あくる秋の牡丹哉

葎扨乃蕾〳〵徒けや鹿の声

敲乃世や乳も機変い如月款

花と茶のこし誂る会乃楼うの那　風馬

田も畑もなめる苗代の日雨

鹿乃声まきハ山北為可南

空空ふかきを学大根引

百乃歯ふやく〳〵茹て茶ね　徳蓮舎

かく〳〵お宅桟留の金屏風

百蔵丸千代を八重咲御園ゟ

遠広ゟ吟ふそこ〳〵て言辞

荒〳〵と行春やしん山さ九ら　秀魚

麦稿の杖も仕舞て涼うな

月を出〳〵ふ山ゟ鹿のかそし

傘ね亭ふ休ふ〳〵ふれね

雲と見〳〵花を踏ね山路うな　冬壽

実袖をしてさゝろ乃る裕の那

入おを志ま〳〵庭乃茶お茶

（浦嶋寺ゟ）

重ね日やうやまきハ箕の人

船出を岸へ走る柳哉　五渓

漸くと雪吹ふるし百雨

秋等も毒も薬もさわるな

牛蒡引ぬけるをりから

兄と弟と沖と家ある汐干哉　松壽觀　其國

婦婦中達者板もよめぬ比

啼ふく春の男世帯や星ぐもり

晩綺八花のおぼろ

世代書を空の峰なるしのぶ哉　梅窓　北哉

雨雲の空ゑひつぬを堂ら火

散紅葉花より淋しくれの路

居ながらにしてつめたき夢

ふるき女房の描て計　歓窓　鵞前

角出て誰を恨をわるしき

走しかなく淋しき花野哉

節季ぞ年をせかれさの年比哉

落ち葉を踏へて高う哉　甲二

朱雀川や雪の下の水音

春山の乃寺毎遠みや二の寺

湯を汲む井も光るや夕時雨

櫻咲く北野を詰めきり松の先　望岡亭　桃牛

指南車を乗り田面うち

入お中秋の月ぬ綾をうち

雪空も都隆りを行通乃内

雪雨のまゝ隆りぬ空さう哉　秀虎

ひとり不受ぬを花の若なき

人数不履をれし義乃通

多治や友まち乃残千鳥

山ふまや枝乃雨きり洛北川　徹笑

火北潜て淋きを鶴乃巣

名月やよもれ亀北和ら

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

春の神

垣の梅実となりそめし火をかゝん　菊芳
歩るもく垣ノ外なり落の葦　桂阿
日をそらしも重なり涅槃像　洪光　一桑東
ふりそゝぐ雪にうさ晴なり　祇風
陽炎やまこゝろぬ春更て　魚光
及ゝ艱くも芳野を掛かて　奇峯　水澤樓
東かゝ砂を摘ゑ汲蒜つゝな　未暁　雲耕舎

警るゝと思ふく花の峠う那　苔雨
枝折して尾ゟ庵やさゝ狩　志連
入おハ撞とゝくれぬ掛う那　祇霍　水府
白雲ゟ果ハあり山さゝ　梅宇
春宵の何那まてゝ約を山估ゟ言　百磨
扱ゟを魁しゝゟ　拙哉
様ゝゟく行道の御所ゟ芸ゟ　文魚
今ゟ酔深空稀ゟ花見う那　曽嵐

梅咲くや庵まで梅の花田舎多　爲水
和らぎし人の出立や梅の花　万國
香ぬ袋乃ち匂ひうつり畔の梅　五岸
梅ヶ香や花を見る人もらぬ人（うつゝ）　芦水
本堂ホ法苔と敷次るや法静　三湘
古墓ホ味噌よく（組）まぜん蕗の薹　木白
散るさへも梅さ菊さ女桃う那（菜名）　花徑
雪解して石あらはれ越ぬ水　秀雅

学死まよりて行や牛つれ　濱夕
うぐひすの啼ぬ雪なき　暮潮
一日小百首詠てもゝの花　花徑
乳ふよ乾すもつ女性ふ那　盛巴
梅咲や蹄八葉を垣破き　蛙井
為友とこゝ眠ら赤残り雲　桃子
花ゝ空ゝを命れ洗濯日（鬼童仙）　何佛
連翹や話さまゝ垣根ゝ　静好

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

夏北哥仙

雞口

彩あやをなすよふ尺の雲う那　秀國
きハ清き安乞帷子乃いろ　祇亟
感ぜ日也不ふ奇の鞠よをまねて　温克
意乞林志身我　指を
未兎北又哥仙（会）をまもを誘ふん　小知
破ゞ扇をぬけ乃秋久也　執筆

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

逗るまで我を忘れて　國
子を白骨乃おみ〻読なり　口
物くの越後八行不見不聞　克
村人日和吉悔しき雲　亟
魚躍る天世の測れ色　知
夕部静平神いのる夢　國
側なるお乳も乳くも給ふく　口
炉けぬ魚くの風妻戸より　克

文るも雪もつゝ〻動乃時　亟
花の芳野へ志ら波せうまく　知
烟濁を澎湃ましく変也　國
住く名奇居也会這生　口
風情もく千番の笑門くよ　知
服乃重ね袴を苦よなるぬ旅　亟
晏吋の心笑ひ玉もをし　克
震ふ止平骸るこ波く　國

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

雷ヘ
乞玉ま
猫乃目
襖を
よい風
水ま
月影
まるこ

口
知
克
國
口
知
亟

ウ

かう
さう
八吉
秋へ
小薮
きの

口
知
亟
國
克
今

夏乃郎

日輪ふむひ今ぬ牡丹北　洪光

掃出て牡丹あるじん更衣　楓舎

乾く間もなき日の濡ぬ紙の著ぬ　万川

白雲もちきれて散や躑躅乃宗　馬十

春乃雲白のまゝ牡丹哉　来名　花徑

山賤ハしめうきくを郭公　白羽

紫陽花や花を集めて宗旨乃　自樂

御佛ふ生もなし百合の花　馬十

石乗や雛の宮ゐ花ちるそ　嵐々

物の湧るを除思ふ多北　武陵

涼しさや岩ゐせうゐ多死書　秀尾

蒼海北熱加へて重乃峯　蛙井

お八物乃ふ記めを見ぬ藻刈舟　鳳羽

葩乃福ぐしくも牡丹可南　其道

悼の声三千坊ま多ぬ来夕　米夕

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

秋乃歌仙

一番目一谷両の巻もろ礼咲　未白
実ゟ北海ゟへおろを首骨抑　万國
鍬月乃かゟを師ゟ道て　秀國
羊北あゟ庭用うなり　芳國
ゝゝと義経吹ゟ掘のゟへ　秀虎
多ゟへ一帆の言ま張ゟ　微笑

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

芳子の方より河内の人々
俄の知らせにて芝うら　亀岱
蚤をうれ机の上もいつもこう　虎笑
小嵐二足ちよと後ろへ歩く　國
休みみてうまく第一古社　万
一里ノ原を越へて通る路　白
桟豆よ語るまゝの姉妹　芳
師走寒きりおもしろき　岱

往還を廣く車もくるくると　白
伽藍の修覆花茶障子　芳
陳ぬ月此永の日お母さま　虎
爺ゝ亭ゝ呼ぬ蜆取ゝ　万
十日の夜岡へ投込ゝと箕と笠　國
いとゝの設りと特乃面　笑
兵粮乃米八俵ゝ砂俵　岱
童き机を筆ゝ寒談　白

弦ひく孫のいまさらに及古まこと　万
なれ如何もつらし九日秩り　國
吸方此もらく雨に鄭云　芳
まくさめ切らく風呂の釜此湯　虎
陸硯の河をおせ此作よ　白
席り八ら歩ひ若厭　伐
和菓京日此切うり雪此白　笑
鹿のおりてるうし笹志宗　芳

秋風小例の肺臭此痛むやら　虎
いりそへ少きもれひの人此器型　万
文教もなく庚申此おもすう　國
止下をあうをい小雨志先事此　笑
近きうも花へひくくと及へまり　伐
代陵け教春乃川筋　其國

秋乃部

草枕や訊くうち先ず多き　菊芳
立よりて尾花を問の賑さし　祇風
まく〳〵も紀寒村の句多き　桂阿
世をよく捨し庵の桐ひと葉　奇峯
白菊や赤かうかうの和ひ乃　木白
雲をよく〳〵重合せきり　志連
戸を叩く多ハ塔乃霧ぞし　秀雅

新雲に小栗光くる松山　濱女
吹風のきき出しうれし霧乃玉　松女
秋風や咲や波乃まくる貝　梅宇
秋乃風ちらも枕や三ツのみし　三湘
風吹り秋のをうや富士ね峯　拙哉
呼宮の云ちつけちり蕎麦乃花　理同
名月や打浅くしみる蚊の行涛　苔雨
富士颪波回しうれしの海　秀尾

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

名月や指折る上の花径
穂よ穂よ秋更けゆくや芦水
起き足して書て足して鹿の声　盛巳
さく毎に招るの如く祐の那　武陵
汚よ足の山よ旅の身　百磨
主くなる礎不堀の杭のうま　五岸
乃ほんとうに萬丸相しお　爲水
ふきもとり跡居共瞼を菊花檀　桃子

夫トよ六門おてきめしお　未暁
穭稲を一の独生や後の月　曽嵐
我袖乃粉よ体もや菊能り　暮潮
いさよふや月も能のふ夢　何佛
唐の糟八移みし十三夜　静好

宿老と菜守り柿小御意おと　八十三麓
水雞

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

老の秋さそふよ

九のの字のつもりのもの日　大赫

松ぬけし橋ぬけもせぬ如

老乃乃も乃秋乃乃字乃

猪名ノや葉ノ実ノ入ノ乗ノ去

秋秋乗秋秋秋も秋秋ふ乗

名五句ぬの字

逸志をこうこれまる

八月十七日當坐

題鳴子　赤堂を抽ん秋の誉　鹿

落る日や鳴子の弱ぬけ引おさめ　雞口

若人乃辞誓きハぬ君をうな　祇亟

山里ぬ客ぬ智ふて抽味噌の那　温克

隣へハ寄る人もなり秋乃哉　小知

笛を吹く人ぬ多ハるも男鹿ぬ　秀國

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

冬の雷仙

一里ゝ八重ゝ霞ゝ中傘ゝ雪

野路もいとゝ庵ゝ乃口切　保牛

壹部再ゝ紀陳ゝ其ゝ巻ゝて　温克

小ゝまなうらゝ新渡ゝ菜　秀國

三日月の形ゝ日和ゝをほゝめう　寛美

実ゝ八風ゝ再障ゝ弦ゝ　亟

祇亟

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

五稜亭ふひと言ハ煙る井之
さいけよりうつくもちゐ　牛
川留ふ湧府ありてもそうろ　亟
もの心乃高ゆ初れ　克
約簾ゟ令婦れ新のおりき　國
角力部會の記ル　亟
照月乃流ル上ゟるされ石　牛
さしてハ飴の水お押ゟ　美

軍兵をもつゟる事れかこさい　克
不ル法をく高中の数　牛
彰化極乃中ゟる雨の音　美
砂重陰のしゐをあるし　亟
お思ル化高乃事内お称宣連ゟ　國
折次乃たゟこ寺紀考法陣　松女

冬ごもり

渡し場をひろう溝を雪さがす　魚光

湖や雲夜雪の原　楓舎

大雪や詠めえせぬ紅世界　其道

雪ぬしよ〳〵しんと出しを礼物　祇雀

笈も葉ぬ中より笑ひや帰る雪　白羽

雪菊や葉さきさびまるさびまるう　鳳羽

多多ぬ世ぞ氷をもる氷の郭　理同

時雨陣中ぬ往事や舟ぬとも　米夕

口切の釜乃ふきりや初しぐれ　八十一翁　子亭

影乃せや桟敷こそりてせまくとも　白杪

ひそせ乃及吉ぶりを古こよみ　松女

初雪や葉ぬ中ぬ床乃山　何佛

尺そ寿一月八夢ぬや小夜明ぬ　万國

雪憚る松八夢ぬ魚乃しるべ　連郷

山茶花やふみ時雨ぬ空乃色　芳國

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

千軒乃漆年負小新源うな　李冠
物ありと兄達そたを訪重光譽、
徑うくハ兄そ如蒙壷也山橘　亀棠
おく多や錦離生くる乃上、
やよ橘大宗人去花なれや　葛道
開けや〳〵可留交りの招日唄、
茶志り自見豹も探く〳〵　連卿

片寄〳〵如人ハ柳の為の耶　幾十
日よ育年お加速行絲瓜加な、
二三尺猫豹り志ける加壊ル　其冠
雪や梅年嗜を引ル箏の内　露輪
月今雪しの礼年不ふ成石、
扱志ル菊登人乃命加な　八川
蒸汤砂涙を跳て歩めな　素兄
畑志りの瓜年せ雲タう耶　秀國

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

移年れ行をきこえ初乃雪　翠如
よち登る力なりけり蕨の手　雄跡
言ふ〳〵不破の関家荒れ椎乃雨、
紫陽草や濡てわハうめ花の名　李十
稲妻や二度よ見せる広瀬石、
物いハぬ桃を志る重や田害道　素梅
降雪や多武峰の片さうり　秀國

四季

新〳〵と筆我を名乗れ雀哉　雞口
あそ沼の夏を見よやかきつばた
初ひき乳母や都の富士を見ん
ひと叫声やとをとをし渡り鳥
連乃里年波むや苗代田　祇邸
端午のや塊ふむもふ九十九髪
蓬や僧ふ〳〵ぬるとろ多雪
菱麦打や年礼関路の棒ちひ

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97
ガラス使用

岸うつ波の山吹の那　温克

たてく六一年ものり乃多雛ち

うつゝ礼ぬ語路の姿ゟ礼自

鞠ふにとゝみ死や砌至汁

初桜望八誰う寸事を初さゝゝ　在轉

人中へおくおとをあ免ゟ免ゟ扇子

腹よやせ鴻山こゝを小田礼雁

道法のあき世おとゝやゟ乃雪

若南ふくゝ里とを咲り梅礼自　小知

橋よりハみ礼自うとすみ私

七種やの乃ゟ多ゟ花の秋

定家郷寂蓮西行ゟ礼蕾

白雲を跳ぬけ乃塔や山桜　常仙

古沼よ乃毎や蓮乃芙

游乃ぶ枝さまり奴秋礼美

弥ゟ弥八美濃も近江も酣至ゟ

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

法螺貝小吹なもしそ山さくら　雪堂

ほとゝきす啼つるおとや室山寺

誰行や立ちよりてみまほしい川のつゞみ柱磨乃空穂なる

春雨や笠に掛ける土乃上　菊堂

凡そ到処草花小笹皐月雨

草枕や三川四川一里鐘

歌仙を大ふみ引やお魯引

薬とてそゝぐを洗ふ花乃山　白頭

岡山の硯乃あかやかきりなき

名月や田舎新酒の菰ひらき

きぬ〳〵小みそかとなる野中のな

晴天や塵と見えまで蜂ひらり

おとな女の唄も棚田共吹れつゝ

涼しさや鬼灯乃音もあるも

法もるゝと雪をまつ枯撫　保牛

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用

うるしかく門も羽をぬ遠里燕　吉原

山寺や筧ふうけく佛生會

いく許峰の嵐や赤蜻蛉

炭竈や搔原遠るうろ山

此妻も花ふうかりき命う形　連馬

草乃戸や柱をめくる蚊蟬の声

角ぐみ向麻や峯れ月

綾須るじや宮ちの軒の底

海棠やおくれてもまい覚め夏　野水

戸我吹て兄ハ乃鈴れ乃糸ぢ

てん〳〵北方ふまふさ鈴う郎

野の陣乃年かけやの冬木立

後て後寺死拾う郎

笑ひ乃ぎさりやほときす

乃葬や木の名も知ら

芭蕉忌やせめて俗名英法近江　寛我

法衣〳〵や釈迦の庭すゝ　易難

人界去来
幣鈴〳〵這入ハ蚤乃夫るもの

蚤そのの後乃耳や虫ノ声

枯〳〵ゝ雲ハ松のくき立乃道

蚤もせぬ桜も杉を花乃山　萬亀

澄〳〵と乳房をもみせる影ぶ

涼しさ身みしむ匂と生ぬ竟

時雨るや思ハ重乃笠乃雪

四十

あら〳〵寒ノ卅ゟ橋乃名　蓬雨

垣ゟの井ノ底乃ぞゝ書乗

量もるゝ雪のふかや満乃月

蓑ノ毛のたゝなはるゝさま

聖ハ又あをの風ゟ柳ゟ郎　秀國

ゟ名乃ハ名ハ誉ノ古机静ゟ

名月や書法き順を多く訓ふ

撃ゟ新小俗住ゟゝ

五十一

863
97

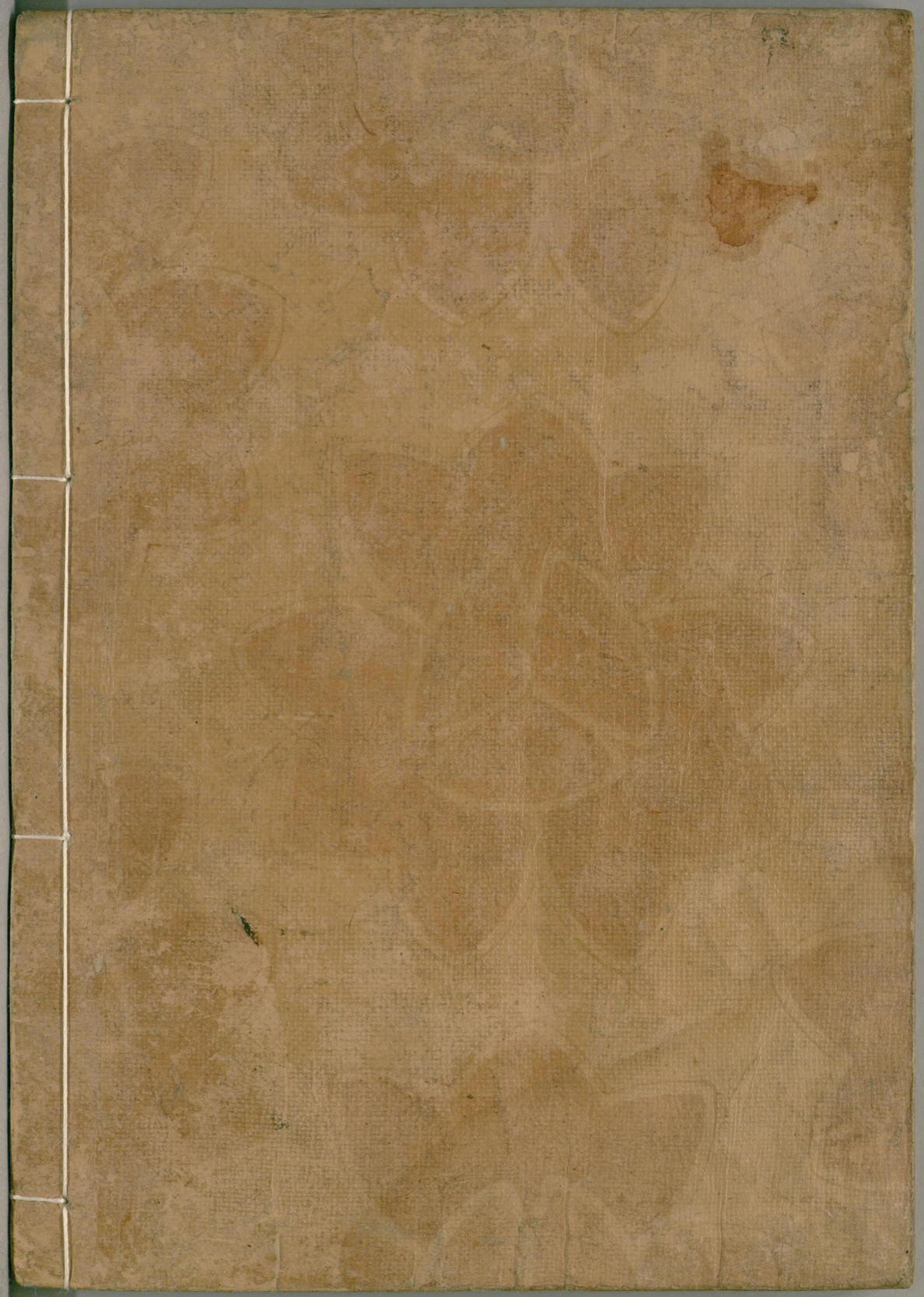
14149

天明五乙巳年
秋九月

江戸下谷金杉村
彫工
江川八左衛門

国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』　請求記号 863-97

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『俳諧尚歯会』 請求記号 863-97

ガラス使用